

お寺の社会性

—生臭坊主のつぶやき—

最終回

竹中尚文

1. お寺に生まれて

私はお寺で生まれて、そこで育った。私には、お寺という空間が日常であった。それが私にとってお寺が非日常的空間と感ぜない理由だと思っていた。つまり、「夜の本堂は怖くないのか？」と尋ねられたときの答えである。特に怖いと思わない。この質問の背景に、お寺を霊的空間と捉える人もいる。うちは田舎寺だから、私は境内に落ちた猫や狸の糞を拾い集める作業をすることがある。お寺が霊的空間であるなら、こんな作業は不要である。夜の本堂を怖く感ぜないのは、私がお寺で育ったからだと思ってきた。

しかし、思い返してみると幼児の頃、何か悪戯をしでかして、罰として本堂に放置されるのがとても怖かった。きっと、そんなに長い時間ではなかったとも思うが、怖かった。今も覚えている恐怖感というのは、

かなり強いものである。それは、暗闇に対する恐怖感ではない。閉じ込められたのは、昼間である。薄明るい本堂であったが、怖かった。

それは、いくら幼児であったとはいえ、本堂にやって来る大人たちにただならぬ空気を感ぜていたのかもしれない。普段はにこやかに接してくれる人たちが、顔をこわばらせてやって来る。お葬式の最後にお骨を抱いて本堂に参ってくるのである。深い悲しみの空気は、幼児である私にも伝わった。この時、私にとって本堂は非日常空間であった。

幼児の時に感ぜた恐怖感を今は感ぜないのはなぜだろうか。ただ単に大人になったということではなかろう。死に対しての感情は、恐怖感がなくなった訳ではない。そんな人はいないだろう。感ぜが鈍くなるだけのことだ。今、私はお葬式のご縁を重ねて、死に対してとても強い悲しみを感ぜる。涙もろくなったと

感じる。涙を隠すのに苦労することが多くなった。

では、なぜ本堂を日常的に感ずるようになったのだろうか。おそらく、得度をして僧侶になった時に、本堂や阿弥陀様を日常の暮らしの中に感ずるようにしなさいと、教えられたような気がする。教えられた明確な記憶はないが、私は仏様を日常的に感ずるようにすべきであると思うようになった。いろいろな人やご縁に教えられたのだと思う。

かつて、お世話になった長尾雅人先生は起床されると直ぐに、居間にある仏壇に手を合わすのが常だった。仏壇が居間にあるのはいい。最近の住宅は、仏間を設けることが少なくなった。仏壇は居間に置けばいい。法事はお寺の本堂を借りればいい。

2. 本堂で英会話

本堂で子供たちの英会話教室を始めて約2年になる。今はイギリス人の講師が教えている。毎週50人程の子供たちが、本堂にやって来る。

お寺の境内で、子供たちの声がしなくなって久しい。それを何とかしようと、私たちは思った。私たちというのは、寺に深く関心を寄せてくれる人たちであった。そんな人たちの多くは高齢で、自分たちの子供の頃はお寺の本堂で正座をして、お経

を習ったものだという。私にお経を教えろと言う。私が子供だったら、一番に逃げ出しそうな話した。私がイギリス人になり、お経が英会話に変わった。

本堂での英会話教室は、専光寺キッズサンガという団体が運営している。50~30代の人たちが10人程で世話人となってくれて団体ができた。彼らが講師を雇い、生徒募集をして、会を運営している。私は子供の英会話教室をしないと、お願いをして、見ているだけである。

かつて、私はカリスマ住職にならないと決めた。もちろん私にはそのような才能もない。以前にも書いたが、仏教婦人会の人たちが、ホームレス支援のいなり寿司を作ってくれている。住職は「やりたい」と言って、みんなに「やって」とお願いするだけである。住職が目立っているお寺より、そこに集う人々が輝くお寺であってほしいと思っている。

3. 住職の出番

そんなわけで子供の英会話教室でも、私の出番はあまりない。この2年ほどの間で、一度だけ出番があった。

一人の男の子が、周囲の子供たちにいたずらをされ、からかわれるようになった。彼の表情がみるみる暗くなった。

講師と教室アシスタントと私で相談をして、私の出番となった。布袍(ふほう)という黒い衣を着て、袈裟をかけて子供たちの前で話しをした。この本堂では、お葬式もする。またお葬式の後には、いつもお骨を抱いた家族の人たちが悲しみのうちに参ってくる。本堂は、涙の乾かない人たちが参ってくる所でもある。この本堂で、笑顔を振りまいて遊ぶ子供たちは、どれ程の人々を救ってくれているかを知ってほしい。私も、彼らの笑顔に救われた。仏教の教えでは、生きることは苦しみであると言っている。だからこの本堂で子供たちが笑顔を振りまいてくれるのは、とてもありがたいと話した。

その後、子供たちに笑顔が戻った。子供たちの笑顔や歓声は、人々の心を軽くする。本堂という空間の力もはたらいたのかもしれない。本堂という舞台上で、子供たちは自分の演じるべき役割を考えたのだろうか。子供たちはここでいかに振る舞うべきかを考えたのだと思いたい。

私は、お寺の本堂という空間の力を改めて思い知った。私にとって、本堂は日常の空間であるから、その力に気付いていなかった。お寺の人間が、お寺の力に気付いていなかった。

4. おわりに

これまで私の駄文を読んでくださって、感謝の気持ちを申し上げます。

これからも、私は専光寺という舞台上で人々が人生物語を語ってくれるのを期待している。ここでは、一人ひとりの個の感情が語られ、それらが結集して人々に生きる力を与える結果となることを願っている。住職はこの舞台の演出家である。私は顔を出したがりの演出家であるかもしれない。

これまで私の文章を読んでくださった方々は、何処かで仏縁を結んでいただけたら嬉しい。そのご縁は専光寺とも結びついているのだろうし、私とも結びついているのだろう。

これまでもこれからも、ありがとう。